

古典文藝の研究



岡田誠

岡崎義恵著作集 3

古典文芸の研究

宝文館刊行

古典文芸の研究



定価 1000 円

昭和三十六年三月十日 第一刷発行

著者 岡崎義恵

発行者 宝文館

(代表) 伊崎治三郎

印刷者 根本力三

東京都新宿区東大久保三ノ丸

発行所 株式会社宝文館

東京都千代田区神田神保町三ノ七

振替東京二八〇

印刷・中教印刷
製本・大光堂製本

序

ここに「古典文芸の研究」と題して集録した二十三の論稿は、ほぼ江戸時代までの日本文芸に関する研究で、この著作集の他の巻と重複しないものを選んだのである。それで「万葉集」「源氏物語」及び芭蕉に関する独立の研究は、ほとんど含まれておらず、明治以後の作家・作品に関するものも除かれている。

ここに「古典」といつたのは、書名として、便宜上江戸時代までの文芸を指したのであつて、厳密な意味での「古典」ということについては、私の他の論文に詳細に述べてある所を見て頂きたい。「古典」の語はここでは便宜的に用いたわけであるから、この書の「総論」の部に収めてある論稿の中には、明治以後に触れているものもあり、必ずしも江戸時代までという限界も厳守しているとはいえない。何分この著作集は、まだ単行本になつていない論稿を集めるという目的の下に企画したことなので、この巻などは、他のまとまりのある巻からはみ出したものを拾い集めたという意味もあつて、組織的になつていないのは、やむを得ないことであつた。

本巻の論稿には、雑誌などの需めに応じて書いたものが多く、それらは題目も編集者の発案によるものであり、中には内容もかなり通俗的に、読み物として執筆したものがある。ところが「本意と本情」のように、大学の講義稿本を材料として、純学術的に論述したものもあつて、その間には非常な距離がある。この点は巻末の初出文献目録などを参照し、その心構えで見て頂きたいと思う。

右のようなわけで、この巻が日本古典文芸の体系的な研究を示し得るものとは思つていないから、もう少し重大な問題について、補足したいと思う点が多いのであるが、それは巻末に掲げた「本書以外の関係論文」について、すでに発表してある論考のあることを知つて頂きたい。特に第三部「文芸理念」の方面は、美の日本的形態について検討した数々の論考を見て頂きたく、これは機会があれば、何等かの形で全部をまとめておきたいと望んでいる。

本巻でただ一つの未発表の新稿「近松における愛と死」は、不思議なことに、私のこれまで発表した原稿の中に、近松を論じたものが一つもなかつたので、これを書き加えたのである。私は近松の浄瑠璃を大学の講義や演習で出したことは数回あり、そのノートもあつたし、また「源氏物語の女三宮と大経師昔暦のおさん」「堀川波鼓論」「鑑の権三重帷子論」「心中宵庚申と心中二つ腹帯」など、相当入念に書いた原稿もあつたが、戦災のためすべて焼失した。今、草卒の際書き記したこの一編の草稿で、私の近松に対する愛を代表させることは遺憾千万である。

近松だけでなく、私は日本の戯曲・演劇に対しては深い愛着の念を抱く者であるが、この著作集に、

それらについて研究したものが、極めて乏しかったことは、実に不思議である。思うに劇に関する論文は読者が少ないためか、雑誌・講座などからの依頼が稀で、そのため執筆の機会に恵まれなかつたように思う。私は少壮の頃、日本戯曲史の著を思い立ち、歌舞伎脚本について講義したこともあり、「大南北全集」「黙阿弥全集」を讀破して、ノートを作ろうと志したこともあつた。それらのノートもすべて灰燼に帰して、日本演劇に関する私の愛情も知識も、ほとんど跡を止めなくなろうとしている。それと共に、何百回ともわからない観劇の記憶も、皆水泡のごとく消え去るであらう。これをおえば、老境の寂寥は真に深いものがあるのである。

昭和三十六年一月

岡崎義恵

古典文芸の研究

目次

序

第一部 総論

日本文芸作家の展望……………	三
日本抒情文芸の展開……………	二〇
日本文芸の回顧……………	四一
日本文芸と宗教……………	五一
文芸にあらわれた日本の風光……………	五八

古典文芸における笑いの本質……………七二

第二部 作家と作品

古事記の歌二首……………九一

万葉か新古今か……………九三

伊勢物語の様式……………一〇二

源氏・平家・芭蕉……………一一五

女房の才能……………一三三

和泉式部と俊成女……………一四五

象徴法としての縁語……………一五四

文芸としての和讃……………一六二

歴史文学の本質……………一七五

つれづれ草の美意識……………一九二

俳諧と連歌……………二〇二

西鶴鑑賞の方法……………二一六

西鶴の詩精神と散文精神……………二二四

西鶴の世界……………二五五

近松における愛と死……………二六五

第三部 文芸理念

「をかし」の本質と展開……………二八九

本意と本情……………三一一

一 本意・本情の問題……………三一一

二 和歌における本意……………三二〇

三	連歌における本意	三五四
四	能における本意	三七五
五	俳諧における本意と本情	四〇二
六	物語における本意	四二二
七	現代文芸との関連	四四〇
	本書収載論文	四四五
	本書以外の関係論文	四四七

第一部

總論

日本文芸作家の展望

一

文芸を制作する者は個人であると考えるのが常識であるかも知れない。しかしながら、少し立入って考えてみるならば、そう簡単にはいつてしまえないことに気付くであらう。

民謡のようなものは誰が作ったということも明らかでない。「記」「紀」の歌謡は、多く歴史上の著名な人物の作となつてゐるが、それは歴史に取入れられた時そうなつてしまつたので、その前に作者のわからない民謡として、伝誦された時代があつたと想定することが出来る。「万葉集」巻十一の巻頭にある相聞の旋頭歌などは、人麿歌集にあつたものとなつてゐるが、どうも人麿の作らしくなく、やはり民謡が人麿歌集の中に収められたものらしく思われる。民謡といつても、誰か民衆の中の一人の作者が作ったのかも知れないが、謡われる間に、何人もの口にかかつて変形したとも考えられるの

で、そうなると数人数十人の合作というようなことになるであろう。

民謡は近世の「松の葉」などという歌謡でも、作者を誰と指定し得ないものが多い。謡物はすべてそうであつて、謡曲・浄瑠璃の類でも、多少そうした傾向がある。「平家物語」のような語り物も、一人の作者を指定することは無理で、実際伝本も無数に相違しており、どの本を誰が作つたなどというようなことは、到底わかるものではない。物語・小説類でも、大衆の読むものは、作者など余り問題にならない。戯作者などはわざと匿名で書いている。それは戯作という職業を恥とする心からでもあるが、作者ということが、そう大切な問題でなかつたからである。

それで、文芸というものの価値が十分自覚されなかつた古い時代には、作家は誰でもよかつたし、時代が新しくなつても、大衆に享受される作品は、作品そのものの興味で価値が定まり、作家の人格などは問題にされなかつたのである。

文芸の作者が誰であるかということが重大な問題になつたのは、一つには貴族の社会が文化を占有し、社会的位置の高い貴族が作品を生み出すようになったからであり、一つには文芸の技法が発達して、専門作家というものが必要になつたからである。「万葉集」になつて、多くの作品に作家の名が付けられ、それが伝説的に附加されたのではなく、事実によつて決定されるようになったことを考えてみるとわかる。柿本人麿・山部赤人などという大歌人は、貴族としての位置は低かつたが、やはり官僚の端に列している人で、これらは主として専門歌人として、行幸などに加わつたために名が残つ

ている。東歌の民謡は、無名作家の作として、国別に分けられているのに、防人の歌には、一々低い階級の作者の名が付けられている。これは防人が軍人として公の位置を持ち、家持のような専門の貴族的作者の指揮の下に制作したからである。その他天皇・皇后・皇太子以下貴族の作者は皆名がわかつているし、旅人・家持のような人は、大伴家という名家の出であると共に、専門歌人でもあつたので、その作はほとんど残りなく作者の名を明らかにしてある。「万葉集」の最後の四巻などは、家持の集とか、歌日記とかいう意味さえ持つている。人麿・赤人まではまだそれほど個人的ではなかつた。宮廷歌人として、国家の一員という立場から歌っていることが多い。家持時代になつて、作家は個人的立場を著しく示すようになって来たのである。

平安時代を通じて、貴族文芸が発達して行くにともない、貴族的作家と専門的作家とが相合してその存在を明らかにして行つた。しかし、それは宮廷で重い行事と見られていた和歌と漢詩との領域を中心にしたものである。平安時代の歌集には、すべて貴族的作家の名が明らかにされている。どのような小さな作家でも文獻の上に名をとどめている。このようなことは世界にも類の乏しいことであろう。それで勅撰集の作者の名などは、文芸作家として価値があるというより、貴族として価値があるために、後世に残つたものともいえるのである。その証拠には、作者名の上に官位が付けられている。たとえば「新古今集」を取つてみる。「皇太后宮大夫俊成」などはまだよいが、「摂政太政大臣」などというのは、これだけでは誰のことだかわからないに相違ない。ところが、その当時ではこれで良

経なら良経ということがわかつたのである。「百人一首」の「法性寺入道前関白太政大臣」などは笑話になる程長つたらしい名で、本名が明らかにされていない。道長という人間の社会的位置を暗示するものである。

これはしかし、和歌の世界のことで、物語などになると、その作品の社会的位置が高く認められていなかったたので、作者はほとんどわからない。紫式部の名が伝えられたのは、「源氏物語」が余りに偉大な作であつたためであらうか。「堤中納言物語」になると、この頃一部の作者が明らかにされ、やはり宮女の作であることがわかつたが、和歌のように作者は問題にされなかつたのである。日記・随筆・紀行の類は、その作品が非常に個人的なもので、今日の私小説などと同じく、作家を離れては作品が味えないところもあるから、これはその意味で作家の名が比較的明らかになつてゐる。

このように作品の内部の意味に参加するために作家の個性が重要視されるということは、近代になつて著しい現象と見られるに至つたが、日本にはすでに千年も前にそうした現象がある。「源氏物語」が写実小説として世界のどのような作品にも先んじているのと並んで、「かげろふの日記」「枕草子」「更級日記」などが、作者の個性とその体験とを表現する作品として、やはり世界の告白的作品に先んじていることに注目すべきである。これらが文芸の培養に専念した貴族社会の中に生れ、個人的精神に深く深く探求の目を向ける女性というものによつて作られたことを無視し得ない。このような芸術的、女性的な時代が、古代日本に花を開いたのは、どうした運命であつたであらうか。私はひそか

に日本国民が芸術的、女性的性情を持つた国民であることを信じている。それは「みやび」とか「物のあはれ」とかいう語であらわしてもよいものである。これは宣長の考え方と一致する。私は戦争中でもこのことは言いつづけて来たが、ほとんど誰も注意してくれなかつたように感じている。

しかし、作者の個人的意義が真に重大なものとなつたのは、日本でも近世のことである。中世はまだ勅撰集に載る歌人か、「方丈記」「徒然草」のような随筆の作者かでなければ、個人としての名は、さほどの意義を持たなかつた。元祿の三大家、西鶴と芭蕉と近松とに至つて、作家の名が輝かしいものになり、作者の名によつて作品に価値が加わるというまでになつて来たのである。真の近代文芸というのは、自然主義以後の西欧文芸が流入してからのことであるという考え方は、一面の真である。

西鶴時代から職業的、専門的な作家というものは成立していると思う。西鶴と芭蕉とはほとんど同時に現れて、はつきり個性的なものを日本の文壇に印したのである。この二人の世界観は、恐らく他の何人とも混同することのできないものである。西鶴は伝記が十分わからず、芭蕉は比較的わかつているが、作品にあらわれた作家魂ともいうべきものは、火のように明らかである。その時まで何人も観得ず、感じ得なかつたものを、作品の中に焼きつけているのである。個性的人間というものが、はじめて日本の作家にも生れたという気がする。近松になると戯曲というジャンルの性質上、あまり個人的になり得なかつたが、それでも同時代の紀海音などとはちがつて、愛の人としての個性が明瞭である。その頃になると、真淵・宣長などという学者にも個性があらわれた。二人は共に復古主義者で、